

論文要約

心理臨床における構造化に関する研究 —「自己関係」と「私の生成」を中心に—

井芹 聖文

本研究は、心理臨床において行われる「構造化」という言葉で表現される営みについて、その営為が元来「自己関係」を前提としたものであると捉えた上で、主にはクライアントの「自己関係」のありようの変容と「私の生成」を促すための心理臨床家の理解と関わりを理論的かつ実践的に検討したものである。

序章では、心理臨床実践において「構造化」や「構造」というテーマで扱われる事柄の例として、精神分析そして深層心理学の創設者である Freud, S. (1913/1983) の言明に始まる面接構造化に関する議論を取り上げた。今日では面接場面の構成や技法の選択を示す意味での「構造化」という言葉がさまざまな学派で用いられているが、心理療法の対象が神経症圏に限らず多様な症状や障害を抱える人々へと拡大してきたこともあり、「構造化」の対象や程度、目的もまた多岐にわたる状況が見受けられる。本研究では、深層心理学的観点から心理臨床における「構造化」に関する現況とその営為の目的を検討し、「構造化」という切り口から心理臨床的事象の理解を深め、その臨床実践のさらなる可能性について考察することを目的とした。

第1章では、心理臨床における「構造化」を検討する際に、何に注目することが重要であるかについて考察を行った。まず準備段階として、「構造のない」状態の比喩となる「混沌」に着目した。混沌は原初の状態や万物の根源を意味し、混沌と対峙するものとの関係によって多様に捉えられるものである。この混沌の変容の契機として「分離」のモチーフが確認され、「分離」が混沌の内部で自然に生じる場合と外部から特定の基準や評価を伴って行われる場合とに識別された。次に本研究では心理臨床における「構造化」を「クライアントの主体的な行動を促すような「場」を整えること」として提示した上で、田中 (2001) の指摘を踏まえて、心理臨床実践の場でクライアントを理解し、その変容を問うためには、心理臨床家がみずからも「構造化」された「場」に飛び込み、クライアントの「内側」の世界に参入することが求められるのではないかと考えられた。そして「治療構造論」と「心の構造」に関する先行研究を精査した結果、これらの議論の基盤には「私」が「私」自身をいかに捉えるかという「自己関係」を前提とした考え方が見出さ

れ、主には神経症圏を対象とした従来の心理療法もまた「自己関係」を前提として成立し、発展してきた経緯に触れた。ここから「自己関係」のありようの変容と、「私」というクライアントの主体がいかにかに成立していくのかといった「私の生成」を本研究の中心的なテーマに位置づけ、そこにセラピストがいかにかに心理的に関わることができるかを検討するといった問題設定を行った。その際「面接構造」とクライアントの「心の構造」を有機的に関連づけながら論じることとした。

第2章から第4章は、混沌を構造化する試みであり、「自己関係」を成立させ、さらにはそのありようを変容する契機として、命名行為を取り上げて検討を行った。

第2章では、心理臨床場面で見られる命名行為の特徴を概観し、その理論的検討の方法論について考察した。心理療法で見られる命名に関して、命名対象の多くは症状や病気、箱庭や描画、夢など、可視・不可視の事物であり、症状や病気を抱える、砂や玩具と関わる、絵を描く、夢を見るというように、それらは「私」と深く結びついたものである。ここから命名のプロセスとは「私」が「私」自身を知ろうとする営為につながるものが考えられた。一方で、命名が創造的な側面と破壊的な側面との両義性を備え、「分離」の作用を根幹に持つために、命名によって対象に内包される豊かなイメージが枯渇するおそれや、主体と対象との関わりが途絶える場合があることが示唆された。そこで、主体と対象との生きた関わりを捉える意義を強調し、クライアントと心理臨床家との相互作用により命名が行われるという、心理臨床場面に即した命名機序を捉える視座を提示した。

第3章では、非臨床群の大学生・大学院生20名を対象に箱庭を用いた調査研究を行い、作り手自身による箱庭への命名体験のプロセスとその様相について検討した。方法としては、一回限りの箱庭制作を対象として、制作後の面接の冒頭と終盤で計2回の作品への名づけを問うことにした。調査協力者の語りを分析した結果、全体的傾向としては、見守り手からの題名の問いかけは、作り手が制作時のイメージ体験と距離を置き、客観視する動きを促すことにもつながるが、他方で題名が箱庭とイメージの接地点に生まれ、同時に見守り手を意識した新たな語りの立脚点となることで、さらなるイメージ体験の展開や新たな気づきをもたらされることが考えられた。また個別事例の検討からは、箱庭制作から制作後の面接に至るまで作り手と箱庭との間で行われた交渉の産物として題名が付与されること、命名後も必ずしも言葉で表現しきれない「余韻」(岡田, 1993)を作り手と見守り手との間で大切にすることの意義などが提示された。以上を総括して、箱庭への命名を臨床実践に援用する可能性とその限界を指摘した。

第4章では、みずからの抱える心の苦しみについて考え、病名・診断名によってその活路を見出そうとする自己診断に着目した。はじめに先行研究を概観し、病名の付与が自身の抱える苦痛を軽減させ、その困難さとの関わり方を見出していく契機となる一方で、その名前の認識がかえって症状やその人自身を見失わせるおそれがあることを指摘した。次にアスペルガー症候群と見立てられる青年男性との事例を検討した。自己診断をセラピストに告白する場面の考察では、クライアントがみずからつけた病名によって自身の不全感を埋め、アイデンティティを見出そうとする動きが窺われた。さらに自己診断の告白がセラピストという他者になされ、他者からの承認を得ることによって、社会とのつながりを持つようとする自己紹介としての意味合いがあることが示唆された。

ここまでを通じて、命名が、内省しそこで動いているイメージに触れるための行為として機能しうる反面、必ずしも自己理解やイメージ体験の進展につながるものでないことを確認し、セラピストの配慮の意義を論じた。また「自己関係」の重要な要素である「私」を前提として検討を行うのではなく、「私」がいかにか成立するのかという「私の生成」について考察する必要があると考えられた。そこで第5章と第6章は、「自己の未成立」(山中, 1976)の状態、「主体のなさ」(河合, 2010)といった特徴を有すると考えられる「発達障害」の人々との心理臨床実践について検討を行った。

第5章では、近年では薬物療法や療育が主流となりつつある「発達障害」への実践的援助について、深層心理学的アプローチの立場から再考を行った。まず「自閉症」や「発達障害」に対する理解と関わりの変遷を追いながら、主体性や「自己関係」を前提とした従来の心理療法のやり方を踏襲するのではなく、「発達障害」に対しては「主体の成立」(河合, 2010)を試みる大切であるという問題意識に筆者が立つことを明示した。この意識のもとで「広汎性発達障害」の診断のついた男児とのプレイセラピーの事例を提示し、セラピーの特徴やその展開と発達検査の結果との関連を比較しながら検討を行った。考察では、自他未分化な世界を生きるクライアントとのプレイセラピーにおいて見られた「定点・参照点の獲得」「分離のテーマの展開」というテーマは発達検査の結果の変化にも影響しており、状況の認知や比較といった精神機能の発達と関連していることが示された。そして神経症圏の子どもを対象としたプレイセラピーが遊びに表現されるイメージの「内容」を吟味するのとは異なり、「発達障害」へのプレイセラピーでは遊びの「構造」に着目することの臨床的意義が見出された。一方で、「発達障害」においては分離の兆しが見えても確固たる境界が確立するに至らず融合的な動きに回収されやすいことが示

唆され、セラピストがクライアントの主体性を期待する意識にとらわれることへのおそれについて言及した。

第6章では、第5章に続いて「私の生成」のプロセスを考察するために、「自閉症スペクトラム障害・精神発達遅滞」の診断のついた男児とのプレイセラピーについて検討した。身体感覚的な自己刺激行動を続けるクライアントに、セラピストがその行為を模倣することで「自閉の共有」が試みられ、次第に両者が融合的関係となり、一体感を味わうプロセスが続いた。そして網の上に置かれた玩具を移し合うといった、お互いに一定の動作を時間差で行うやり取りが生じ、一体感とずれが同時に展開するこの弁証法的な遊びを繰り返すことで、表現を受け止める存在の認識、始点と終点の生成、距離の発生など、セラピストとの関係性や遊びに変化が見られるようになった。本事例を通して、クライアントの融合的世界にセラピストが参入することの意義と、その融合的一体感の中で生じたずれによって、クライアントの個としての「私」が生成されていく展開が示された。

さらに第7章では、「自己関係」や「私の生成」とは異なる切り口で、心理臨床における「構造化」の可能性を検討した。河合（1997）は「人間の精神は混沌から秩序へと向かう。しかし、さらによい秩序へと一方向的に向かうものではなく、混沌→秩序→混沌へと円環的に変化するのではなかろうか」と述べている。とりわけ「自我の多様性と不連続性」（黒川，2013）が顕わになる認知症高齢者の生きる世界において、表面的にはその崩壊が見られやすくなってしまふことが考えられる。そこで特別養護老人ホームで行われた認知症高齢者との箱庭を介した関わりを取り上げて、認知症高齢者が箱庭を行うための「構造化」の工夫と配慮について論じたのち、調査事例を提示した。初回は自身の混乱を収めるように箱庭アイテムが無機的で羅列的に置かれたが、作り手である認知症高齢者がアイテムを置く際の自身の感覚を味わい出したころ、作り手の活動的な姿勢や他者との情緒的な交流が見られるようになった。その後、見守り手との会話が主になり、作り手にとって重要だと考えられる「継承」や「古い」のテーマについて語られるようになるが、それらは箱庭が眼前に存在するといった「面接構造」が基盤となってもたらされたことが示唆された。認知症高齢者の「心の構造」はある種の混沌と秩序とが共存しており、老化と認知症の進行が起こる中でも「今、ここ」の主体に出会っていかうとする心理臨床家の姿勢と、箱庭表現の「内容」だけでなく「構造」に着目することの臨床的意義を提示した。

本論文を結論付ける終章では、これまでの論を踏まえた上で、「構造化」に対する心理臨床家の態度について考察した。心理臨床家の態度を「する」と「なる」の違いから検討

し、セラピストが「外側」から「操作的」に関わるのではなく、「内側」に「主体的」にコミットしていくことの臨床的意義を論じた。結語として、クライアントが「今、ここ」の自分に気づき、潜在的な変容可能性や新たな主体性に自身が出会っていくための「仕掛け」として「構造化」を位置づけ、そのような「仕掛け」を有効に機能させることができるかは、心理臨床家がこのクライアントとこの「場」に専心する態度と視点にかかっていることを提示した。

本研究の課題として、心理臨床において「構造化」という言葉で表現される営為について十分に網羅できていないこと、「自己関係」の変容の契機として命名行為以外の現象や体験を検討する必要があること、各事例の「構造化」の目的が筆者の中で揺れながら論じられており、検討された事例にも限りがあることなどが挙げられた。けれども、特に「発達障害」の人々や認知症高齢者に対する心理的関わりにおいては幾多の「構造」に着目する臨床的意義は大きく、事例検討や適切な調査研究の集積によって、「構造化」の観点から心理臨床場面で見られる現象や主体のありようを理解する重要性と多彩性は今後さらに増していくとして、これらの課題は本研究の発展可能性を示すものだと考えられた。

文献

- Freud, S. (1913). On Beginning the Treatment (Further Recommendations on the Technique of Psycho-Analysis I). *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 12, pp.123-144, London: Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis, 1958. (小此木啓吾(訳)(1983). 分析治療の開始について フロイト著作集9 人文書院 pp.87-107.)
- 河合隼雄 (1997). 「老いる」とはどういうことか 講談社+α 文庫.
- 河合俊雄 (2010). 夢への内在的アプローチとその限界 こころの科学, 154, 2-9.
- 黒川由紀子 (2013). 高齢者と心理臨床——衣・食・住をめぐる 日本心理臨床 5 誠信書房.
- 岡田康伸 (1993). 箱庭療法の展開 誠信書房.
- 田中康裕 (2001). 魂のロジック——ユング心理学の神経症とその概念構成をめぐる 日本評論社.
- 山中康裕 (1976). 早期幼児自閉症の分裂病論およびその治療論への試み 分裂病の精神病理, 5, 147-192.